



日本人には自然の木や石、水、あらゆるものに神様が宿るという考えがあります。そして目の前の現象だけに振り回されず、自分の良心に従い真心を尽くす生き方が自然に受け継がれています。祖先から受け継いだ宗教を超えた「おてんとうさまがみているよ」という子供でも分かる教え、それは『古事記』の神々から学んだものでした。日本で一番古く、国家が編纂した公的な歴史書を個人の表現でお伝えしています。至らない点はどうかご容赦の程、宜しくお願い致します。

《日本初のひきこもり》

数々の問題行動も
アマテラスのその愛の大きさと
包み込んでもらっていたスサノオたちなんだけど
ついについに一線を越えちゃったのねー

ただちにアマテラスに呼び出された
スサノオと八百万の神様たち: (;´ω´)

めちゃビビリ集団の八百万の神様たちなんて
全員が生きた心地してないわけよ。 illi (O_dO) illi

全員がちびりそうになりながらも
勢揃いしたのを確認して
アマテラスは言いました

『言っとくけど
高天原でおこったことは全部アタシの責任だからね。
今回のことは責任を取って
アタシは天の岩戸に籠ります。
いったん籠ってしまったら
こうなった問題の解決できるまで
出てくることはできなくなります。
アタシがいなくなることで
もっと大問題が起こるかも知れないけれど
そこんそこヨロシク』 (▼_▼)y——

『ド、ドド～ン!!』

こうしてアマテラスは
天岩屋戸に完全にお籠りになりました。
そして、今まで明るかった高天原は真っ暗な闇夜と
なっていました。
マァァ—— (°_°) ノ——ジデェェ!??

いきなり何が起こったのか茫然としていた
八百万の神様とスサノオは
ようやく吾に返って
声をそろえて泣いたんだけど

あ～あ
後の祭りよねー
ㄖㄖ (O`ε´O) ㄖマイッた

いくら呼んでも天岩戸を叩いてみても
岩の向うはシーンとしていて
アマテラスの答えは返ってきません。

アマテラスの光がなくなって、
高天原はもちろん、地上の世界も
一瞬にして「不幸」という
真っ暗な闇の世界になってしまいました。
(///ω\\)ズーン

アマテラスがいるときには
「みーんなやってもらえるしい」
「困ったら何とかしてくれるしい」
「相談ごとや愚痴だって聞いてもらえるしい」
と、とりあえず自分の仕事だけしていれば何とかなっ
ただけど.....

暗闇で神様たちが騒ぎ出して
あちこちで自己中同士の小競り合いや
ぶつぶつ、がやがやの愚痴や不満が
ウジやハエがたかるように
高天原に蔓延してしまいました。 ㄣ (ー-;) ㄣㄖㄖ

当然っていうか
そうなればいろんな災いが
あとからあとからおこりして
もうどうすることもできなくなっちゃったの

「スサノオのせいだ!」
「引っ掴まえろ!」
「そんなことしてもどうにもならんだろ」

「このままではいけない。」
「なんとかしろよ」
「おまえがしろよ」

ダチョウ倶楽部的な押し問答で
なかなか問題解決できない八百万の神様たち・

ところでこんな高天原をよそに
天岩戸の中でアマテラスってなにしてたんだろ
う.....

この続きは次回でね
きじこでした～ (へ▽へ)ノ”マタネ!!

東日本大震災 ベトナム中を涙させた一人の少年

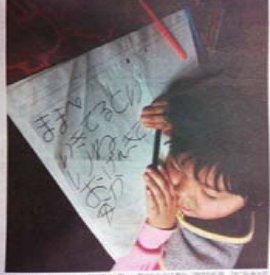


東日本大震災直後福島
県に派遣された一人の警
察官がいました。
彼は在日ベトナム人の両
親を持ち、日本生まれ
人のために働きたいと帰化
して警察官となっていました。
派遣された場所では、震
災と原発事故のもっとも過
酷な状況の中での治安
確保でした
しかし派遣先を訪れてみる
と驚くことに治安は安定し
ており住民の見回りも機能
していたのです。

彼は被災者の埋葬と食糧分配の手伝いを行っていましたがあまりに酷い惨状に泣くことさえ忘れただ呆然と仕事をこなす毎日でした。
そして忘れもしない3月16日の夜...
被災者に食糧を配る手伝いのため避難所となった学校で彼は9歳だという男の子と出会います。
その日は寒い夜でしたがその男の子は短パンにTシャツ姿のままで食糧分配の列の最後尾に並んでいました。
長い列の一番最後にいた少年に夕食がわたるのか心配になり彼は少年に話しかけました。
少年はポツリポツリ話を始めました。あの日、少年が地震と津波にあったのは学校の体育の時間でした。近くで仕事をしていた父が学校に駆け付けようとしてくれました。しかし、少年の口からは想像を絶する悲しい出来事が語られました。
「お父さんが車ごと津波にのまれるのを学校の窓から見たんだ。海に近い家にいたお母さんや妹、弟も助かっていないと思う」

家族の話をする少年は不安を振り払うかのように顔を振りにじお涙をぬぐいながら声を震わせました。
悔しさと心細さと寒さで.....
彼は自分の来ていた警察コートを脱いで少年の肩にそっとかけました。そして少年を少しでも勇気づけられたらと持ってきていた食料バックを男の子に手渡しました。
遠慮なく喜んで食べてくれるだろうと思っていた彼が目にしたものは、受け取った食料バックを配膳用の箱に置きに行った少年の姿でした。啞然とした彼の眼差しを見つめ返して少年はこ

う言いました



「ほかの多くの人が僕よりももっとお腹がすいているだろうから...あそこに入れておけば公平に配ってもらえるから...」
警察官の彼は少年から顔をそらしました。忘れかけていた熱いものが、ふと湧き上がってきたからです。
少年に涙を見られないように...

2011.3.11...あれから8年...

日本のNHK連続TV小説「おしん」を日本以上に愛してくれている国の一つベトナム。ベトナム人は人情味のある人柄とも言われています。
そんなベトナム人の方々が涙したひとりの少年のエピソードをご紹介します

「...まがりなりにも大学を卒業して警官として働いてきた。髪にも白いものが目立つほどに人生を歩んできた自分が恥ずかしくなる。ひととしての道をまさかこんな小さな男の子に教えられるとは思ってもよらなかった。わずか9歳の男の子、しかも両親を始め家族が行方不明で心細いであろう一人の少年が困難に耐え他人のために思いやれる。



少年の時から他人のために自分を犠牲にできる日本人は偉大な民族であり必ずや強く再生するに違いない」
自分の胸の中だけにしまっておくにはあまりにももったいない話でした。誰かとの感動を分かち合いたいと思えば彼はベトナムの友人に自分の体験下話を打ち明けました。
ベトナムの友人は感動し、祖国の新聞記者にこの話を伝えたのです。ベトナムの新聞「Vietbao」の記者は次のような記事を載せて少年と日本を称賛しました。
「彼がベトナムの友人に伝えた、日本人の人情と強固な意志を象徴する小さな男の子の話に、我々ベトナム人は涙を流さずにはいられなかった。我が国にはこんな子がいるだろうか」

この記事が大変は反響を呼びました。決して裕福とはいえないベトナムからも多くの義援金が寄せられました。
この少年の健気さには胸を打たれます。苦しい中でも人のことを思いやれる、少年の美しい行動はきっと彼の両親や祖母から受け継がれたものでしょう。失われていなかった日本人の美德がここに存在します。どこかで元気にしてくれていることを願っています。

またVietbao紙にはこんな記事も掲載されています。
「中国のGlobal Newsという新聞記者が3月17日に取材のために福島を訪れ倒壊した建物を通った時津波でぬれた数千枚の紙幣が広い敷地内に散乱しているのを目にした。しかし日本人は誰も拾おうとしていなかった。」
『50年後中国の経済レベルは世界一になれるかもしれないが、今の日本人のような意識や国民的な高いマナーのレベルに達せられるだろうか...』

世界中に親日国が存在しています。美しい日本人の姿が感動を呼びました。多くの苦しみと悲しみを背負いながらも決して和を乱さず、しっかりとルールを守り常にだれかを思いやる被災者の方々の様子が世界中に発信され多くの国から救援物資や義援金が届きました。

日本人ほど人の気持ちや周囲の状況に敏感にきめ細かく配慮できる国柄は他にあまりないからなのかもしれません。この世界に誇れる『美しい心』と『美しい伝統』をこれからも受け継いでいきたいと思います。

